

出演する振付家・ダンサーへの質問（木村覚より）
回答者：手塚夏子

（1）自分の方法論を言葉にしてもらえますか。

〔自分を分ける〕

体を観察することから全てをやり直そうと思いついたのは、自分を振り付けるための「もう一人の自分」が必要だったからだ。

その1作目『私的解剖実験』では、自分の口や顔に振り付けをして、口のダンス、顔のダンスを踊る。体の一部なのにもう自分ではないような扱いをすることに快感がある。

〔必然への目覚め〕

作品の曖昧さを見つけることが次の解剖実験へのきっかけとなっていく。つまり、「立っている」というだけでも、重心はどこにあるか、眼はどのように前を見てるのか、耳は何をきいているか？足の裏は何を感じているか、そのような在り方の違いによって、その質は何種類にもなる。そう考えれば身体は無限の宇宙のように深く多様だ。

〔分けることによる繋がり発見〕

試行錯誤の中で、もっと細かく身体を分けて感じるができるか試してみる。

『私的解剖実験-2』では、足の小指や鼻の穴や奥歯の歯茎など身体の一部を特別扱いし、身体全体から切り離して感じてみたらどうなるか？実験した。意識した場所とは全然関係ない外の身体の一部が意外なほど反応してびくびくする。徹底的に分けようとすることで、別の新たな繋がりが生じているのだろうか？反応がまた次の反応を呼び、身体は自動運転のように次々動き始める。しかしそれを冷静にもう一人の自分が遠くから見下ろしている。

〔命令の多様化〕

もっと意識的にこの方法で振り付けをしようと思いついた『私的解剖実験-3』では、身体の意識する場所や質をあらかじめ決め、命令通りに意識して、身体は反応に任せる。意識する質はその中で多様になっていく。たとえば、身体の一部に目や耳を付け、身体の中だけではなく外に向かう感覚も生まれる。それは意識の深い層で世界と関わっている感覚だ。

〔関わりを観察〕

観察そのものを作品として上演し続ける過程で、自分自身の心身に現れている物事は、全て、生まれてから現在にいたるまで、出会った人々や物事に対する反応なのだということを感じはじめる。そこで、自分が人と関わっているときの心身の観察をし、関わり連鎖における、深層での出来事を深く掘り下げる作品作りをするようになる。『私的解剖実験-4』～表層から見た深層～では、一緒にお茶を飲んだり世間話をしたり、あるいは誰かともめたり、腹を立ててもそれを押し隠して笑ってみたり、言い出しにくいことをおそろおそろしゃべったりと、そういった日々とぎれなく行われてる関わりが一番表層に見えている部分に、関わりの本質を探したいと思った。3人のダンサーに振付するという初めての試みである。3人の普通の会話を録画し、1分間トレースしたフレーズで恐ろしく繰り返される表層のダンス。それぞれの身体には、私が踊っている時に感

関係者全員参加！ダンスクリティーク

じるような深い層があり、その深いところで起きていることが何層もの層を通して表層に何らかのサインを出している。

〔関わりの最小単位をサンプルに〕

同じ手法で、自分を徹底的に振り付ける作品が『プライベートトレース』である。プライベートな生活をビデオ撮影し、短い一部分からその動きだけをトレースし、振付として展開させる。もっともプライベートな状況の関わりの深層にどのような真実が隠されているか、自らの深層を暴くことにより、人の根底にある関わりの要素を見つめる。

(2) 作品を作る際にもっとも心がけていることは何ですか。

目的を設定しない。どのような結果になるかを限定しないで、無限の可能性に向かって実験を試みる。

(3) 意識している同時代の作家はいますか（ダンス／その他のジャンル）、その理由を教えてください。

岡田利規：一つの物事に対する多次元的な捉え方で、見る物の前提を分解再構成する力がある。

山下残：彼の使う言葉は「限定」するための道具ではなく、私の細部に繋がり、無限に広がるように感じる。

野村誠：音の一粒一粒に光のような力を感じる作曲と演奏。「関わり」の力が主体を超えた力を持つような、人々との作業がすばらしい。

黒沢美香：見せる意識をしっかり持ちながら、そこに自分の必然性をバチッと叩き込む力のあるダンス。

(4) 意識している過去の作家はいますか（ダンス／その他のジャンル）、その理由を教えてください。

過去の作家ではないですが、世代が上という意味で

高校時代は野田秀樹になりたかった。理由はよくわかりません。アイドルでした。

ジョナスメカス（映像作家）：メカスという人をフィルターとして見える世界が再構築される

スティーブ・ライヒ（音楽家）：自分の感じている世界の感覚が分解するのように感じる。

アンゼラム・キーファ（美術家）：現物は見た事ないのに、雑誌に載っていた「フランス革命の女たち」という作品を見た瞬間に「存在」という言葉の認識が変革した。

萩尾望都：一番好きなのは「銀の三角」で、なんと言ったらいいのでしょうか。

植村直己：欲求の強さが訳の分からない役割を果たす。小さな調整の連続が物事を押し進める力となることを改めて思い出させてくれる。

(5) いまのコンテンポラリー・ダンスをめぐる環境についてどう考えていますか。問題点、課題は何ですか。

人々にとってコンテンポラリーダンスがあまり必要とされていない、あるいは役割を果たせる可能性を感じてもらっていない。またダンスを作っている人々もその可能性をあまり感じていないか、欲求の強さが足りない。自分の向かって行きたい方向への切なる前進の欲求みたいなものが足りない気がします。作家のエネルギーがダンスシーンを作っているのではなく、プロデュースする人々の作っているシーンに偏っているような気がします。

関係者全員参加！ダンスクリティーク

(6) ダンスの批評の現状についてどう考えていますか。問題点、課題は何ですか。

満遍なく作品を観て欲しい

多様な価値観を持つ眼差しにさらされる事があまりにも少ないため、ダンサーにとっても、批評家にとっても、前提とする「見てもらう人々」の想定が狭い気がします。その狭い想定の中で批評も展開しているように感じます。多様な価値観にさらされる状況そのものが作品への真の批評性であり、また多様な作品が人々への真の批評性であると思います。

(7) 今後の作品作りで、心がけようと考えていることはありますか。あれば、それはどんなことですか。

劇場で公演をするということに限定しない活動をして行きたいです。

「作品」という言葉の領域を押し広げ、あるいは言葉そのものの意味を剥奪し、作家も観客も真の「経験」をする瞬間を持てるような活動をして行きたいです。

人と関わる事に出てくる力を引き出すような活動がしたい。関係する力が個人の主体を超えて力を持ち、世界に響きを与えるような活動がしたい。